

# 介護老人福祉施設職員の「介護実習指導を通じての学び」の内容に関する研究

ヤマモト アヤミ  
山本 綾美\*

**目的** 介護老人福祉施設の職員の「介護実習指導を通じての学び」の内容を明らかにし、実習に対する関心や、職員の自己成長を促す実習の体制を構築するための資料を得ようとした。

**方法** 首都圏の介護老人福祉施設250施設の職員（「窓口者」「フロア長」「一般職員」各施設1人ずつ）を対象に、郵送法による自記式質問紙調査を実施した。本研究では、「フロア長」を“学生が実習を行うフロアの長”，「一般職員」を“フロア長以外の実習を担当する介護職員”とした。

**結果** 有効回答は82施設の164人であった（有効回答率32.8%）。因子分析の結果、「介護実習指導を通じての学び」の内容として，“実践の振り返り”“施設の評価と職員教育”“利用者支援の新たな視点”“指導方法”“養成校とのパイプ”“仕事への愛着”の6因子が抽出された。相関分析の結果、実習指導継続希望は6因子すべてと正の相関がみられ，“仕事への愛着”とは中程度の相関がみられた。また、「フロア長」「一般職員」を独立変数にt検定を行った結果、6因子のいずれにおいても有意な差はみられなかった。

**結論** 施設職員の「介護実習指導を通じての学び」を促していくことで、実習指導継続の希望、実習に対する関心を高められる可能性があることが示唆された。実習指導に携わる職員の学びを促す実習体制の構築が今後の課題である。

**キーワード** 介護実習指導を通じての学び、実習指導者、介護職員、介護老人福祉施設

## I 緒 言

2007年の社会福祉士及び介護福祉士法改正では介護福祉士養成の教育内容の見直しに伴い、介護実習に関する規定が大幅に変更された。実習を（Ⅰ）と（Ⅱ）に区分し、実習指導者の要件は実習（Ⅰ）では緩和され、介護福祉士の有資格者、または3年以上の実務経験があればよいことになった。一方、実習期間が長く介護過程の展開を中心とした実習（Ⅱ）では介護福祉士として3年以上の実務経験、かつ介護実習指導者講習会（以下、講習会）の受講が義務づけられることとなった。学生にとって実習は重要なものであるが、その中で実習施設の職員は学生の職業モ

デルとしての役割を果たす<sup>1)2)</sup>。しかしながら、学生の円滑な実習を阻害する要因として、施設職員の言動や、実習に対する関心の低さが指摘されている<sup>3)5)</sup>。看護分野の研究だが、実習指導による自己成長を感じている指導者ほど実習に対する関心度が高いとの報告があり<sup>6)</sup>、介護分野においても関心を持って指導に携われることが重要である。だが、介護実習指導に携わることで肯定的な側面に着目した研究は少なく<sup>7)</sup>、その影響を促す要因についても検討されていない。また、実習施設の職員を対象にした研究は実習の責任者である実習指導者1人を対象としたものが多いが、指導者のみで指導することは難しく他の職員にも学生の指導に協力してもらおうのが現状であることから、協力職員も

\* 神奈川県立中井やまゆり園生活支援部生活第2課主事

調査の対象に加えることが望ましいと考える。

以上のことから、実習指導者と協力職員を対象に、「介護実習指導を通じての学び」の内容を明らかにすることを本研究の目的とする。本研究では、「介護実習指導を通じての学び」を「学生への直接的指導や、養成校との連絡調整等実習指導に係る業務全般を通じて職員が感じ取った、得たもので、職員自身の成長につながるもの」と定義する。

## Ⅱ 方 法

### (1) 対象と方法

実習の受け入れが一番多く、介護実習(Ⅱ)の実習施設であることから、介護老人福祉施設を対象とし、「①窓口者(施設の実習受け入れ担当者)」「②フロア長(学生が実習を行うフロアの長)」「③一般職員(フロア長以外の実習を担当する介護職員)」各施設1人ずつの計3人、首都圏の介護老人福祉施設250施設の職員750人を対象に、自記式質問紙調査を実施した。調査期間は、2009年9月12日～10月31日であった。施設長宛てに調査協力依頼書と調査票を郵送し、「窓口者」から条件に合う職員に調査票を渡してもらい、返送も「窓口者」が一括して行うよう依頼した。なお、「窓口者」と「フロア長」が同一の場合は「窓口者」用調査票のみに記入し、「窓口者」用と「一般職員」用の2通の返送をお願いした。

本研究では、学生への直接技術指導にあたると思われる「フロア長」「一般職員」のみを分析の対象とし、「窓口者」と「フロア長」が同一の場合は「窓口者」用の調査票も対象とした。

### (2) 調査項目

#### 1) 「介護実習指導を通じての学び」に関する項目

調査票の項目作成を目的として、2009年に開催された講習会の受講者170人を対象に自記式質問紙調査を実施した。回収数は108票であった(回収率63.5%)。「実習指導に携わることが、

自分の学びになっているという実感はあるか」を5件法でたずね、「ある」「ややある」と回答した81人(75.0%)に「具体的にどのような場面・機会でのようなことを学んだか」を自由記述で回答してもらった。筆者と筆者の所属していた研究室の院生3人で内容分析の手法を用いて分析を行い、「介護実習指導を通じての学び」に関する質問35項目を作成した。回答形式は「まったく思わない」～「とても思う」の4件法を用いた。

#### 2) 回答者の属性

性別、年齢、所有資格、介護福祉士資格の取得方法、介護職経験年数、講習会の受講経験、所属施設の実習指導マニュアルの整備、実習指導継続の希望(4件法)をたずねた。

### (3) 分析方法

「介護実習指導を通じての学び」の内容を明らかにするため、全35項目の回答分布から天井効果のあった6項目と、CITC(Collected Item-Total Correlation)<sup>8)</sup>による相関が0.4未満であった3項目、重なる項目もあったため7項目を除外した上で因子分析を行った(主因子法、スクリープロットと固有値により因子数を決定、プロマックス回転)。ただし、因子負荷量が0.4未満の項目は除外し、再度因子分析を行った。抽出された各因子に属する質問項目の「まったく思わない」～「とても思う」をそれぞれ1～4点とし、因子ごとの項目平均値を下位尺度得点とした。次に、それらの得点と、立場(「フロア長」「一般職員」)との関連をt検定により分析した。また、下位尺度得点と実習指導継続の希望との相関分析を行った。なお、分析にはSPSS Statistics 21を用いた。

### (4) 倫理的配慮

回答者が所属する施設長および回答者に対し、調査票と調査票に同封した書面にて、調査結果は統計的に集計・分析し、研究目的にのみ使用すること、その際に個人や施設が特定されるかたちで回答が外部に漏れるようなことはないことを説明した。また、「フロア長」「一般職員」

は同封した封筒に調査票を入れ封をした上で「窓口者」に渡すよう、書面にて依頼した。

### Ⅲ 結 果

回収数は106施設（42.4%）、そのうち有効回答数は82施設（32.8%）であった。82施設中8施設は窓口者とフロア長が同一であり、本研究では82施設の164人を分析対象とした。

表1 回答者の属性

	全体(n=164)		フロア長(n=82)		一般職員(n=82)	
	n	%	n	%	n	%
性別						
男性	67	40.9	31	37.8	36	43.9
女性	96	58.5	51	62.2	45	54.9
無回答	1	0.6	-	-	1	1.2
年齢						
20歳代	42	25.6	10	12.2	32	39.0
30歳代	66	40.2	35	42.7	31	37.8
40歳代以上	53	32.3	36	43.9	17	20.7
無回答	3	1.8	1	1.2	2	2.4
所有資格（複数回答）						
介護福祉士	142	86.6	74	90.2	68	82.9
ヘルパー	43	26.2	18	22.0	25	30.5
社会福祉士	5	3.0	1	1.2	4	4.9
介護支援専門員	38	23.2	29	35.4	9	11.0
介護福祉士資格の取得方法						
国家試験合格	78	47.6	49	59.8	29	35.4
養成校卒業	61	37.2	24	29.3	37	45.1
無回答	3	1.8	1	1.2	2	2.4
介護職経験年数						
平均±標準偏差(年)	9.3±5.5		11.5±5.5		7.1±4.6	
3年未満	8	4.9	-	-	8	9.8
3年以上5年未満	28	17.1	5	6.1	23	28.0
5年以上10年未満	56	34.1	25	30.5	31	37.8
10年以上	72	43.9	52	63.4	20	24.4
介護実習指導者講習会の受講経験						
有	35	21.3	26	31.7	9	11.0
無	127	77.4	54	65.9	73	89.0
無回答	2	1.2	2	2.4	-	-
実習指導継続の希望						
とても思う	59	36.0	28	34.1	31	37.8
少し思う	82	50.0	45	54.9	37	45.1
あまり思わない	15	9.1	4	4.9	11	13.4
まったく思わない	1	0.6	-	-	1	1.2
無回答	7	4.3	5	6.1	2	2.4
実習指導マニュアルの整備						
有	54	65.9				
無	28	34.1				

注 高校福祉科卒業を介護福祉士資格の取得方法の「養成校卒業」にカウントしている

#### (1) 回答者の属性

表1は、回答者の属性を示したものである。性別は男性が4割程度、年齢はフロア長では30歳代と40歳代以上が多く、一般職員では20歳代と30歳代が多かった。介護福祉士資格は、フロア長で9割、一般職員で8割が所有していた。資格取得方法ではフロア長では国家試験合格が多く、一般職員では養成校卒業の方が多かった。介護職経験年数は、フロア長の平均年数は11.5

(±5.5)年、一般職員では7.1(±4.6)年であった。講習会は、フロア長では3割が受講していた。「今後も実習指導に携わっていききたいか」には、8割以上が「とても思う」「少し思う」と回答、実習指導マニュアルは54施設(65.9%)が整備していると回答した。

#### (2) 「介護実習指導を通じての学び」の内容

表2は、「介護実習指導を通じての学び」の各項目について、「まったく思わない」～「とても思う」を1～4点とし、その平均値(±標準偏差)を算出した結果を実習指導における立場別に示したものである。表3は、プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関、因子別平均値(各因子の合計点を項目数で除した平均値)を示したものである。6因子全体の信頼性係数は0.92であった。

第1因子は、「緊張感を持って日々の仕事に取り組むことができる」「介護技術の基本に戻ることができる」「今の自分の状態を知る、再確認できる」等で負荷量が高く、「実践の振り返り」とした。第2因子は、「職員教育に活用することができる」「所属施設に対する外部の評価が分かる」「所属施設の良い点に気づく」等で負荷量が高く、「施設の評価と職員教育」とした。第3因子は、「利用者の新たな一面を知ることができる」等で負荷量が高く、「利用者支援の新たな視点」とした。第4因子は、「様々な指

導の仕方を知る」「自分の指導の仕方を改善できる」「実習生個人々人を理解する重要性を知る」の3項目で構成されており、「指導方法」とした。第5因子は、「施設の人材確保につながる」「養成校との関係づくりができる」の2項目で構成されており、「養成校とのパイプ」とした。第6因子は、「介護職・相談職としての自分に自信を持つことができる」「この仕事の楽しさを感じる」の2項目で構成されており、「仕事への愛着」とした。「仕事への愛着」において、信頼性係数がやや低いことに留意する必要はあるが、尺度としての信頼性はおおむね確保されたと判断し、これら6因子をもって「介護実習指導を通じての学び」とした。

(3) 「介護実習指導を通じての学び」と立場、実習指導継続希望との関連

1) 実習指導の立場との関連

「フロア長」「一般職員」を独立変数、「介護実習指導を通じての学び」下位尺度得点を従属変数としてt検定を行った結果、下位尺度のいずれにおいても有意な差はみられなかった。

2) 実習指導継続希望との関連

「今後も実習指導に携わっていききたいか」との質問に対する「まったく思わない」～「とても思う」の回答を1～4点とし、「介護実習指導を通じての学び」下位尺度得点との相関分析を行った結果は、表4のとおりである。実習指導継続希望は6因子すべてと正の相関がみられ、「仕事への愛着」とは中程度の正の相関がみられた。

表2 「介護実習指導を通じての学び」35項目の平均点と標準偏差

項目番号	質問項目	全体(n=164)		フロア長(n=82)		一般職員(n=82)	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	養成校の教育内容を知ることができる	2.81	0.70	2.86	0.63	2.75	0.78
2	実習生の利用者への対応・態度に学ぶべき点がある	3.23	0.66	3.20	0.66	3.27	0.67
3	教科書と現場とのギャップを知ることができる	3.31	0.72	3.26	0.65	3.36	0.80
4	介護職・相談職としての自分に自信を持つことができる	2.72	0.70	2.72	0.68	2.72	0.73
5	この仕事の楽しさを感じる	2.94	0.73	2.95	0.72	2.94	0.74
6	新鮮な気持ちになれる	3.27	0.68	3.25	0.66	3.28	0.69
7	今の自分の状態を知る、再確認できる	3.27	0.71	3.25	0.68	3.29	0.75
8	初心に戻ることができる	3.36	0.74	3.36	0.69	3.35	0.79
9	自分を常に振り返ることができる	3.20	0.71	3.20	0.70	3.20	0.73
10	自分たちのケアを見直すことができる	3.36	0.63	3.41	0.59	3.30	0.66
11	業務の中で当たり前になっていたこと、見落としていたことに気づく	3.27	0.69	3.29	0.64	3.26	0.73
12	自分の行う介護の根拠・意味を考えることができる	3.26	0.68	3.26	0.63	3.26	0.73
13	介護技術の基本に戻ることができる	3.29	0.63	3.28	0.58	3.30	0.68
14	利用者の新たな一面を知ることができる	2.92	0.79	3.00	0.69	2.84	0.88
15	利用者に対する様々な捉え方があると知る	3.01	0.73	2.96	0.72	3.05	0.74
16	利用者の理解を深めることができる	2.81	0.74	2.83	0.70	2.79	0.78
17	実習生が来ることで、利用者のQOLが向上する	2.47	0.75	2.47	0.71	2.46	0.79
18	所属施設に対する外部の評価が分かる	2.61	0.73	2.67	0.72	2.55	0.74
19	所属施設の課題に気づく	2.91	0.69	2.94	0.66	2.89	0.72
20	所属施設の良い点に気づく	2.78	0.60	2.83	0.54	2.73	0.65
21	職員教育に活用することができる	2.96	0.67	3.02	0.63	2.90	0.71
22	他職員のことを知ることができる	2.74	0.72	2.85	0.67	2.63	0.75
23	職員全体がレベルアップできる	2.58	0.69	2.63	0.64	2.52	0.74
24	施設の人材確保につながる	2.73	0.84	2.78	0.81	2.68	0.87
25	養成校との関係づくりができる	3.04	0.70	3.11	0.66	2.96	0.74
26	介護を仕事とすることの責任の大きさを感じる	3.36	0.65	3.32	0.67	3.40	0.63
27	後輩を育てる責任を感じる	3.39	0.68	3.42	0.65	3.36	0.71
28	自分の目指す専門職像を持つことができる	2.87	0.78	2.89	0.74	2.84	0.82
29	緊張感を持って日々の仕事に取り組むことができる	3.18	0.68	3.14	0.65	3.22	0.70
30	実習生に指導するために自ら勉強する	3.20	0.70	3.22	0.71	3.18	0.70
31	人に教えることの難しさを知る	3.68	0.52	3.64	0.53	3.72	0.50
32	様々な指導の仕方を知る	3.39	0.58	3.41	0.61	3.38	0.56
33	実習生個人々人を理解する重要性を知る	3.36	0.64	3.40	0.54	3.32	0.72
34	自分の指導の仕方を改善できる	3.29	0.61	3.35	0.59	3.23	0.61
35	実習指導マニュアルの必要性を感じる	3.36	0.73	3.36	0.75	3.35	0.71

表3 「介護実習指導を通じての学び」の因子パターンと因子間相関、因子別平均値 (n=164)

項目番号	質問項目	実践の振り返り	施設の評価と職員教育	利用者支援の新たな視点	指導方法	養成校とのパイプ	仕事への愛着
29	緊張感を持って日々の仕事に取り組むことができる	0.73	-0.05	0.04	-0.06	0.06	0.06
13	介護技術の基本に戻ることができる	0.73	-0.06	-0.08	0.17	-0.02	-0.02
7	今の自分の状態を知る、再確認できる	0.64	0.06	0.01	-0.03	-0.07	0.08
28	自分の目指す専門職像を持つことができる	0.52	0.30	-0.10	0.00	-0.01	0.12
12	自分の行う介護の根拠・意味を考えることができる	0.46	0.13	0.00	0.23	0.04	-0.19
21	職員教育に活用することができる	-0.28	0.66	0.07	0.23	-0.09	0.01
18	所属施設に対する外部の評価が分かる	0.06	0.64	-0.06	-0.17	0.18	0.01
20	所属施設の良い点に気づく	0.28	0.63	-0.05	-0.13	0.12	-0.10
22	他職員のことを知ることができる	0.09	0.63	0.05	0.01	-0.14	-0.03
19	所属施設の課題に気づく	0.15	0.57	0.01	0.10	-0.03	-0.02
23	職員全体がレベルアップできる	-0.06	0.49	0.20	0.07	0.06	0.05
14	利用者の新たな一面を知ることができる	-0.01	0.08	0.81	-0.16	0.08	0.00
15	利用者に対する様々な捉え方があると知る	0.20	-0.09	0.67	0.03	-0.01	0.10
16	利用者の理解を深めることができる	0.13	0.22	0.67	-0.04	-0.11	0.01
17	実習生が来ることで、利用者のQOLが向上する	-0.23	0.01	0.64	0.08	0.12	0.04
11	業務の中で当たり前になっていたこと、見落としていたことに気づく	0.31	-0.12	0.45	0.21	-0.05	-0.15
32	様々な指導の仕方を知る	0.30	-0.07	0.00	0.66	0.03	-0.04
34	自分の指導の仕方を改善できる	-0.17	0.35	-0.02	0.65	0.01	0.04
33	実習生個人々々を理解する重要性を知る	0.21	-0.12	-0.02	0.63	0.08	0.06
24	施設の人材確保につながる	-0.03	-0.05	0.17	0.01	0.85	-0.08
25	養成校との関係づくりができる	0.04	0.09	-0.11	0.15	0.62	0.13
4	介護職・相談職としての自分に自信を持つことができる	-0.02	-0.06	0.06	-0.01	0.03	0.82
5	この仕事の楽しさを感じる	0.23	0.05	0.04	0.08	-0.08	0.45
	Cronbach $\alpha$	0.80	0.80	0.84	0.78	0.74	0.63

注 ■はプロマックス回転に伴う主因子法

	実践の振り返り	施設の評価と職員教育	利用者支援の新たな視点	指導方法	養成校とのパイプ	仕事への愛着	平均値	標準偏差
実践の振り返り	-	0.60**	0.59**	0.60**	0.35**	0.46**	3.17	0.52
施設の評価と職員教育		-	0.57**	0.51**	0.39**	0.42**	2.76	0.48
利用者支援の新たな視点			-	0.46**	0.31**	0.47**	2.89	0.58
指導方法				-	0.35**	0.37**	3.35	0.51
養成校とのパイプ					-	0.25**	2.89	0.68
仕事への愛着						-	2.82	0.61

注 Pearsonの相関分析, \*\*p < 0.01

表4 実習指導継続希望との相関分析結果 (n=156)

## Ⅳ 考 察

### (1) 「介護実習指導を通じての学び」の内容

本研究では、「介護実習指導を通じての学び」の内容として、6因子が抽出された。

“実践の振り返り”について、藤江ら<sup>9)</sup>は、「自らが自らのために行う介護福祉士の質向上の技

術」と振り返りの思考の重要性を述べている。因子の項目には「自分の行う介護の根拠・意味を考えることができる」とあり、学生からの質問や、説明するために自分の行う介護について

	実践の振り返り	施設の評価と職員教育	利用者支援の新たな視点	指導方法	養成校とのパイプ	仕事への愛着
実習指導継続希望	0.33**	0.31**	0.29**	0.30**	0.28**	0.44**

注 Pearsonの相関分析, \*\*p < 0.01

言語化することで、なぜこのような介護を行うのか、自らの実践を振り返り、自らの介護の質を高める機会になっている。

“施設の評価と職員教育”“利用者支援の新たな視点”は、小倉ら<sup>7)</sup>が「実習生から受けた影響」をたずねたインタビューの中で挙げた「客観的に見た自分の施設の特徴」「新鮮な物事の捉え方と自由な発想」と重なる指摘である。“施設の評価と職員教育”だが、実習生は利用者家族やボランティアと同様、施設にとっては外部の評価者でもある。実習生を通して所属施設を知る一方で、実習生から他の職員に教わったケアを聞いたり、実習日誌への他職員のコメントを読んだりすることで、他職員への理解を深める場にもなっている。また、“利用者支援の新たな視点”だが、実習生が介護過程の展開を通して職員も気づいていなかったアセスメントの視点を提供したり、利用者の新たな一面を引き出したりする等、実習生の存在が利用者のアセスメントにもかかわっている。

“指導方法”は、因子別平均値で一番高かった。年間何十人、ホームヘルパーの実習も含めれば何百人の実習生を受け入れている施設もあり、多くの実習生を指導しその指導方法に悩む一方で、実習指導を通して指導方法を改善、指導能力を向上させていく。このことは、実習生のみならず、新人職員の指導にも活かされるものである。

以上4つの因子は先行研究でも触れられることがあったが、本研究独自のものとして“養成校とのパイプ”“仕事への愛着”が抽出された。実習した施設に入職する学生は多く、実習指導を通して将来の同僚となる可能性のある人を育てているという思いは、職員の実習指導への意欲にもなっている。さらに、実習施設の懇談会や、実習施設向けの勉強会を実施している養成校もあり、養成校とのパイプは人材確保だけでなく、施設のレベルアップにもなっている。また、“仕事への愛着”は、介護の仕事に就くことを目標とする実習生と接し、自分の体験や考えを言葉にすることによって、専門職としての自分を意識したり、介護の仕事の良さ、楽しさ

を再確認するのだと考えられる。原野ら<sup>10)</sup>は介護職員が仕事を継続している理由について、責任感がある、仕事の意味を見いだすといった「仕事に対する価値」を挙げており、実習指導を通じて感じる「仕事への愛着」は「仕事に対する価値」にもつながるものである。

「介護実習指導を通じての学び」は6因子で構成されており、すべての因子が実習指導継続希望と正の相関関係を持っていた。実習指導を通じて得られるものを感じているから継続したいと感じるのか、もともと実習指導に関心があるため熱心に取り組み多くのものを得られるのか、どちらが先行するのかの特定は難しい。しかし、実習指導を通じての学びを促していくことで、実習指導継続の希望、実習に対する関心を高められる可能性があることが示唆された。

## (2) フロア長、一般職員の特徴

本研究では、実習指導者と指導者以外の実習指導に携わる職員の、意識や指導能力の違いが学生の円滑な実習を阻害する原因の1つではないかと考え、「フロア長」「一般職員」を対象とした。しかし、「介護実習指導を通じての学び」からは両者の相違は明らかにできず、その理由として、一般職員においても介護福祉士有資格者が多く、実習指導に熱心な職員が偏って選出された可能性がある。一般職員は、介護福祉士の有資格者の中でも養成校卒業者が多く、フロア長に比べ、自らも介護実習を体験しているということになる。富田ら<sup>11)</sup>は、看護実習指導者自身の実習経験を、「指導者の存在が実習でのうれしさやつらさに大きく影響すると気づき、学生の立場に立ち、学生を尊重したかわりを行う上での要因の1つ」と評価している。介護福祉士は実務経験で受験資格が取得でき間口が広い一方で、養成校卒業者、つまり実習経験者は有資格者の半数以下というのが現状である。介護職員全員に実習を義務づけることは現実的ではなく、それが望ましいかもわからないが、実習の中で実習生としての思いを理解してくれる存在というのは必要である。実習生にとっては一般職員も1人の実習指導者であり、

一般職員を施設の中でいかに育てていくか、一般職員の実習指導を通じての学びを促していくかは今後重要な視点である。

## 文 献

- 1) 古川和稔. 介護実習における学生と施設職員との関係形成プロセス. 介護福祉学 2008;15(1):81-7.
- 2) 鈴木知佐子. 第4章2 実習指導と介護実習との関連性. 澤田信子, 小櫃芳江, 峯尾武巳編. 改訂・介護実習指導方法. 東京:全国社会福祉協議会, 2006:71-92.
- 3) 宇野幸恵, 慶野幸恵, 橋本佳子. 介護学生の実習意欲をそこなわせる要因及び最後まで実習を継続させる要因について. 佐野短期大学研究紀要 2006;(17):129-44.
- 4) 占部尊士. 介護福祉実習における学生の意識変化に関する研究-第I段階介護福祉実習前後での検討-. 介護福祉学 2009;16(2):216-28.
- 5) 山根淳子. 学生の実習意欲に影響を及ぼす実習指導者の働きかけと環境についての一考察-7年前の調査と比較して見えた新しいカリキュラムに沿った介護実習指導-. 金城紀要 2011;(35):221-31.
- 6) 金子美香子, 鈴木のり子, 菅野寿美子. 臨地実習指導者の指導に対する意識-やりがいと関心度, 自信度, 負担度の関係-. 第36回日本看護学会論文集(看護教育) 2005:227-9.
- 7) 小倉和也, 奥田紀久子. 介護実習指導に対する実習指導者の意識. 瀬戸内短期大学紀要 2007:38:21-30.
- 8) 服部環. テストの内部一貫性を大きくするための項目選択技法. 教育心理学研究 1991;39:195-203.
- 9) 藤江慎二, 佐々木宰. 介護福祉士の「振り返り」技術に関する研究. 介護福祉学 2008;15(2):202-6.
- 10) 原野かおり, 桐野匡史, 藤井保人, 他. 介護福祉職が仕事を継続する肯定的要因. 介護福祉学 2009;16(2):163-8.
- 11) 富田幸江, 仙田志津代. 実習指導者の学生時代の実習体験の振り返りと実習指導のあり方への認識-指導者にとって実習体験を振り返ることの意味-. 紀要(つくば国際短期大学) 2006;34:135-45.